

完全学校週五日制 導入から半年

かまを手に稲刈りに励む児童 = 平木小学校



「サクリ、サクリ」と黄金色の稲穂をかまで刈り取るたびに、児童から歓声が上がります。収穫の秋の九月、平木小学校の五年生三十六人が、中庭に作られた広さ約百三十平方メートルの「田んぼ」で、稲刈りをしました。総合的な学習の時間「で、四月から続けてきた稲作体験の総仕上げです。」

毎週土曜日に学校園が休みになる「完全学校週五日制」が始まってから、半年がたちました。ただ、休みが増えただけでなく、「ゆとりの教育」を目指す新学習指導要領などの導入で、学校の授業自体が様変わりしつつあります。①教科の枠を超えた「総合的な学習の時間」の本格化②複数の教員が教える「チーム・ティーチング(TT)」③時間割の弾力的運用などです。市内の小学校三校を訪ね、取り組みを取材しました。

ゆとり活用 授業様変わり

稲作体験 農家の苦勞、自然の力実感

(平木小)

要なので、井戸も掘られました。一粒の種もみが何百倍のお米になるんだよ。松本さんの話に、児童の期待も高まります。

五月になると、代かきと田植えがありました。いよいよ田んぼの中に入ります。冷たい「ぬるぬるしている」。ほとんどの児童にとって、初めての感触です。

くわを手に、土を平らにします。そこに、横一列になつて、苗を一本一本植えました。田んぼの三分の一だけですが、間隔はまちまちで、時間もすくなくかりました。お米を育てるには、手間ひまがかかることを実感できました。

JA西宮宮農支援センターの人たちも、農作業を指導してくれました。雑草を抜いたりスズメよけのネットを張ったりと、児童らの丹精にこたえるように、稲は日に日に育ちます。去年は、背が高くなりすぎたため台風で倒れたので、今年は肥料を抑えました。

「ウサギのふんが肥料になるのに、びっくりした」と、木村梨乃さん。始めは十センチぐらいの苗が七十五センチにも伸びたのを見ると、生命の力を感じます。

「こうして迎えた刈り入れは、父母も一緒に楽しみました。」「米」の字は、八十八の期間を表していると習ったとおり、農家の苦勞がよく分かった」と両浦卓君。豊島卓朗君は、「ご飯粒を残さないようにする」と誓いました。「米作りを通じて、命の大切さを感じてくれたと思います」と、担任の米口征代先生は話します。

「平木米」は、約六十キロも収穫できました。十月末に収穫祭を開き、松本さんからお世話になった人々を招いて、おにぎりを食べる予定です。

先生2人制

(段上西小)



「質問しやすい」と好評

兵庫県の公立小中学校では前年度から、児童一人一人の個性や能力を伸ばし基礎学力の向上を図る「新学習システム」を推進しています。複数の先生を配置したり、児童生徒を少人数に分けて授業するなど、きめ細かな指導に各校が工夫を凝らしています。

段上西小でも昨年からは、五、六年生の算数と理科「総合的な学習」で、担任と別の先生の二人が授業をする「チーム・ティーチング(TT)」と、二学級を三グループに分けて授業をする「少人数授業」を取り入れています。

西村光彦校長は「完全学校週五日制が導入されてから、児童一人一人に、すぐにア

新学習指導要領は「時間割の弾力的運用」をうたい、これまでの四十五分授業以外に、三十分や六十分授業などが可能になりました。

小松小学校は、新指導要領を先取りする形で平成十二年度から、十五分を基準単位に授業時間の枠をさまざまに変える「モジュール・ブロック制」を始めました。



教室や教科担任が固定している音楽や体育、理科などの教科以外は、活動内容に合わせて時間を決めます。

例えば、運動会で合同練習が増えると、他の教科を別の週に移すなどの工夫が、十五分単位でできるので、外部から講師を招いたりするため、固定された時間枠では難しい総合学習にも柔軟に対応できます。低学年には、発達段階に配慮し、集中できる長さの授業時間を設定できます。また、毎パソコンの表計算ソフトを使い、2週間ごとに時間割を作る。児童にも定着している。小松小学校

朝の十五分を読書や計算、スピーチ練習などに充て、基礎学力の向上に役立てています。

複雑な年間授業時数は、パソコンの表計算ソフトで管理し、二週間ごとに時間割を作ります。慣れるまでは大変でしたが、今では現場の実情に応じた授業を組むやすさとの声もありました。と、担当の松本栄次先生。

学級によって授業の終了時間が違つたため、チャイムも廃止しましたが、児童に時間を意識する自主性が育つてきた」と先生たちは感じています。

時間割弾力化

(小松小)

集中力、基礎学力向上へ